

パネルディスカッション第2部

「大学生のキャリア意識調査2007から示唆される現代大学生像」

司会:

京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授 溝上慎一

パネリスト:

福島大学人間発達文化学類・准教授 中間玲子

上智大学総合人間科学部・教授 武内清

独立行政法人労働政策研究・研修機構 キャリアガイダンス部門・副主任研究員 下村英雄

東京学芸大学教育学部・准教授 浅野智彦

●京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授 溝上慎一

それでは時間がまいりましたので、パネルディスカッション第一部を始めます。昼食時間も十分に取れないなか、一日タイトなプログラムで申し訳ありません。時間があまりありませんので、早速始めさせていただきます。

パネルディスカッション第一部は、私をはじめの趣旨説明で申し上げましたように、二次的に構成されています。つまり、私たち関係者の方で調査報告書を解析して、簡単ですけれども解釈もつけて皆様にお届けしております。それをきょうご登壇の先生方にもお渡ししていて、その各分野の専門の、しかもフロントランナーの先生方が、一体どこに着目をするか、ということをお今日は着目したいと思います。

主催者側がこんなことを言うのは何ですけれども、この先生方の面子を一例に並べるのは結構苦労がありました。私のほうでレジュメを拝見しておりますけれども、非常に楽しみな議論が出てくると思います。

ちょっと紹介も兼ねて、どうしてお立場でお話いただくか、という説明をいたします。

一番右は中間玲子先生。福島大学の人間発達文化学類の先生でいらっしゃいます。中間先生は、今日私たちが電通育英会との共催でやりました報告書の共同研究者として、分析に携わられた先生で、本来でしたら私も報告に立つところですが、今日は司会ですので、中間先生に、みなさんにお届けしている調査報告書の概要を報告いただきます。専門は私と非常に近いんですけれども、青年心理学。自己形成論とかキャリア教育とかをなさっている先生です。

続きまして、武内清先生。非常にご著名な先生ですので、みなさんご存じかと思います。上智大学総合人間科学部の教授でいらっしゃいます。教育社会学の先生でいらっしゃいます。大学生調査、大学生研究においては第一人者であられまして、私は武内先生がこれまで出されたご著書が大変参考にして勉強してきました。その先生が私たちのこういう調査を、一体どこに着目して見るのか、というのは本当に興味深い点でありまして、今日はそういう点をご報告お願いしております。

続きまして、下村英雄先生。独立行政法人労働政策研究・研修機構、キャリアガイダンス部門副主任研究員でいらっしゃいます。下村先生はお立場上、政策も絡めてキャリア形成、キャリア教育を研究されている方です。調査研究だけでなく幅広く、社会的にご発言されている方です。同様に、下村先生のお立場で、この結果をどういう風にご覧になるか、ということをご報告お願いしております。

最後に浅野智彦先生でいらっしゃいます。東京学芸大学教育学部の准教授で社会学の先生でいらっしゃ

います。さきほどの教育社会学と社会学は一緒じゃないか、と思われる方もいらっしゃると思いますが、ずいぶん違います。浅野先生は、私とは、自我論とかアイデンティティ論、まあ私は自己形成論とありますが、そちらで非常につながりの深い先生でいらっしゃいます。浅野先生の自己物語論などは、非常に世の中に広まっている本でありまして、みなさんご覧になったことがあるかもしれません。今日は浅野先生には、自己論とかではなくて、むしろ若者論の立場からご発言いただこうと思います。最近の浅野先生のご著書に、『検証・若者の変貌』というのがありまして、勁草書房から出版されております。非常にインパクトのあるご著書でして、そういう成果も踏まえながら、キャリア教育とか大学生調査ではありますけれども、若者の立場からご発言いただけると期待しています。大学生というのは、教育ステージの概念ですから、若者と必ずしも一緒ではありません。だから、そういう若者の立場から一体何が課題になるのか、という点をご報告お願いしております。

それでは、私のほうはもうこれくらいにしまして、早速、中間先生からご報告をお願いしたいと思います。それでは、中間先生、よろしく願いいたします。

● 福島大学人間発達文化学類・准教授 中間玲子

「調査結果の概要報告」

みなさん、こんにちは。福島大学の中間と申します。私のほうからは、今回、大学生のキャリア意識調査2007 というものの、調査結果概要の報告をさせていただきます。既に資料の封筒のなかに、調査結果概要の冊子がございますけれども、こちらではポイントを絞って、こういうことが見受けられました、という簡単な報告をさせていただきます。

昨今どの大学でも、キャリア教育やキャリア形成支援事業というものは盛んですけれども、実際に大学生がどのようにキャリア形成をしているのか、その実態についての検討例は少ないと思われます。この問題意識から、この調査は始まっています。

まず調査結果の概要です。

調査における着眼点なんですけれども、では大学生のキャリア形成を理解するにはどうしたらいいのか、ということ。今回私たちは、2種類のライフ、というのを見ていくことが重要ではないかと考えました。ご承知のように、ライフには、日常生活という意味でのライフ、というものと、人生という意味でのライフ、との2種類がございます。

日常生活としてのライフは、学業やクラブ・サークル活動、アルバイト、ボランティア、趣味、娯楽といった、正課、正課外の活動、キャンパス以外の活動全般を指します。これまで多くの大学生の意識調査というものがなされていますが、これまでの多くは、この側面に焦点をあててきたのではないかと考えられます。

他方、人生としてのライフは、職業、進路選択、生き方や将来展望などの人生設計を指します。心理学者が専門の研究の一環として調査することは見られたと考えられますが、一般の大学生調査でこの側面を体系的に扱うことはあまりなかったかと思われます。しかし、キャリア教育やキャリア形成支援が広く大学で行われるようになってきている現在、これも含めて、大学生の意識というものを捉えることが必要ではないかと考えられました。

つまり、単なる就職支援や進路選択というようなことだけではなく、一体どのように人生設計を始めたのか、どのようなキャリア形成をしようとしているのか、ということを含めて捉えようとしたのが、本調査の目的になってきます。

方法は以下のようなものです。インターネットリサーチによりまして、大学1年生と3年生に対して調査を行っ

ています。大学1年生 988人、大学3年生 1025人に対して調査を行っています。

結果はたくさんあるんですけども、今回の報告では、特に以下の3点に絞って報告させていただきます。

まず1点が、人生・将来に対する意識です。いつくらいから人生設計を始めたのか、そして将来の見通しを持っているのか。2点目は、大学生活に対する意識、およびその実態。これは今までの大学生調査でもされてきた点ですが、大学に対してどういう意識を持っているのか、そして大学生活をどのように過ごしているのか、という点。そして3点目は、この2つのライフ、上記に挙げた人生としてのライフ、そして生活としてのライフ、それぞれがどういう関連性を持っているのか、という点です。

まず1点目。仕事、人生に対する意識についてご報告します。いつから将来の仕事や人生設計を考え始めたか、ということについての結果ですが、これでは、1年生では、高校1、2年生頃、大学受験期、の順で多く、3年生で最近、高校1、2年生頃、の順で多く見られています。

では、将来設計の程度はどれくらいでしょうか。将来設計について、こちらにございます5項目で尋ねましたところ、1年生3年生ともに、大体の将来設計はあるけれども、同時に漠然としていてつかみ所がない、という意識も高く見られた、ということが特徴として挙げられます。

では具体的に、自分の将来の見通しというものを持っているのか、ということについて尋ねました。その結果、1年生、3年生ともに、7割以上の学生が、将来の見通しを持っている、と回答しています。これは、2001年に溝上先生を中心にして1200名に対する調査を行っているのですが、そのときもほとんど同じ割合で見受けられています。そのときの結果は、持っている人が72.9%、持っていない人が27.1%で、学年、あるいはサンプリングやあるいは2001年、というような年代を問わず、ほぼ同じような結果が得られています。

ただ将来の見通しを持っているだけでは、持っていたからどうなんだ、ということになりますので、実際に実現に向けた努力をしているのかどうか、ということを探りました。そのときに、次の3つの質問をしております。

1.何をすべきか分かるし、実行もしている。2.何をすべきかは分かるけれども、実行はしていない。3.何をすべきかはまだ分からない。

将来の見通しを持っている者であっても、だいたいこの3つに分けることができます。その結果、将来の見通しを持っている人であっても、6~7割の学生が、何をすべきかを分かっているが実行は出来てない、というふうに答えています。

この割合も、2001年に行った調査とほとんど一緒でした。当時の調査でも、35.1パーセントのものだけが、何をすべきか分かるし、実行もしている、というふうに答えています。では、将来の見通しを持っていない人はそれを求めているのか、ということについて尋ねました。その結果、ほぼ半数の人が、求めている、今はみえないけれども、何らかの将来の見通しが持ちたい、と答えていました。

こちらは3年生の方がちょっとだけ割合が高くなっていますが、以前行った調査でも、大体47.4%の人が求める、というふうに答えておまして、大体半数程度の人を求めている、と答えるような結果が見受けられます。

まとめとしまして、将来設計については、大体の将来設計はあるけれども、同時に漠然としていてつかみ所がない、という意識が高いようであるということ。実際的な将来の見通しについては、7割以上の学生が将来の見通しを持っている。しかしながら、そのなかで、見通しを持っている学生の中で、6~7割の学生が、何をすべきかは分かっているが、実行はできていない、あるいは何をすべきかまだわからない、と回答しているようである、ということが結果として示されました。

では2点目です。大学生活に対する意識はどんなものであるか、ということについてご報告いたします。まず

大学進学において、何を最も重視したのか、ということについて尋ねました。これについては、入学前はどうか、ということと、現在どうかであるか、ということについてそれぞれ尋ねています。入学前、現在ともに、専門知識、技術の習得というのが最も多い、ということが示されました。ついで多く見られましたのが、教養や視野の拡大、というものでした。就職に有利、というものと、就職に必要な勉強をする、というようなものについては、入学前と現在とで、割合が入れ替わっていることが見受けられました。

同じ項目について尋ねた2006年のカレッジコミュニティ調査というものでは、一番多かったのは教養や視野の拡大、就職に有利、専門知識・技術の習得、という順位で見受けられました。現在については、教養や視野の拡大、青春を楽しむ、専門知識・技術の習得、というような順位が見受けられました。そのときの調査と比べますと、今回の調査では、1年生3年生を問わず、教養や視野の拡大というものと、専門知識・技術の習得とが入れ替わっていき、教養よりも専門的な知識を求める傾向が高まっているのではないかと考えられました。

では大学生活において、一体どのようなものに重点を置いて生活をしているのでしょうか。大学生活の重点を8つの選択肢から一つ選んでもらう、というような問いをしました。すると、1年生、3年生ともに最も多く見られたのは、何事もほどほどに、というものでした。ついで、勉強第一、というものでした。同じ項目について調査したものでは、勉強第一というものが多く、ついで何事もほどほどに、であったというような結果が得られていますけれども、今回は何事もほどほどに、というもの、勉強第一、というものが1位2位というふうになっています。

ただし、分野を絞った中では、勉強というものが重きを占めているようであることが窺えました。

では、実際に1週間をどのように過ごしているのか。1週間の中で費やす時間というものについて尋ねています。項目というのは、17項目あります。このグラフは、よく時間を費やしたのから順に並べたものです。ここでは週平均の活動時間というものを尋ねているのですが、便宜的に、ちょっと順位を決めるために、このようにまず得点化をしまして、その平均値を出して、おおざっぱにまず順位を求めました。でその結果、一番多く時間を費やしていたのが、大学の授業や勉強、というもの。これは正課のものです。次いで多く見られたのがインターネットサーフィン、で、テレビ、同姓の友達と交際、通学、授業に関する勉強、の順になっていました。

では具体的にどうなのか、ということですが、1年生3年生ともに、最も活動時間が多かったのは、大学の授業や実験に参加、というものでした。6割以上の者が、16時間以上を費やしています。これは週平均ですので、一日に大体3時間以上は費やしている。21時間以上のもも、4割近く見られました。一日に4時間の計算になります。次いで多く見られたのが、インターネットサーフィンをする、というもので、21時間以上のもものが、1年生では16.6%、3年生では19.5%見られました。

16時間以上のもものは3割弱、11時間以上では4割近くのもものが該当しまして、6時間以上になると6割程度の者が該当していました。これは1日に換算しますと、1日1時間以上はインターネットサーフィンをしている、というようなものが6割以上いることを意味しています。

そのほかに多く見られたのが、塾以外のアルバイト、テレビ、通学、同性の友達と交際、といったようなものでした。

ここでは、キャリア意識調査ということですので、じゃあ実際に大学の中でどれくらい勉強しているのか。授業や実験に参加するということは見受けられましたが、主体的な勉強をどのくらいしているのか、という観点から、特にこの3項目を取り上げてみました。授業に関する勉強、授業と関係のない勉強、勉強のための読書、に費やす時間はどの程度か、ということを探りました。全然ない、から、3~5時間、というもの、つまり、1日1時間もそれに費やしていない、という者については、授業に関する勉強については70%のもものが、授業と関係のない勉強や、勉強のための読書、については、8割以上の者がそこに該当していました。なので、授業の勉強や実験に参加、という時間数は多いのですが、自宅で主体的に勉強するという時間はさほど多く取られ

ていないのではないかと考えられます。

まとめとしまして、大学進学の本重要点は、入学前、現在ともに、専門知識・技術の習得が最も多く目指されており、次いで多く見られていたのが、教養や視野の拡大、でした。就職に有利、というのは、入学前よりも現在において低下し、入学後は、就職に必要な勉強、ということが増加していました。大学生活では、何事もほどほどに、を除くと勉強第一、というものが最も高い割合で見受けられました。1 週間の過ごし方では、大学の授業や実験、インターネットサーフィンに費やす時間が多いようでした。授業外学習を1日1時間もしないものは、1年生、3年生ともに7割を越すこと。授業に関係のない勉強や授業については、1日1時間もしないものが、1年生3年生ともに8割を超えていました。

では、これらの人生設計のあり方と、生活の過ごし方がどう関係するのか、ということ、すなわち3点目の問題について、主に入学以前の指導というものが役に立っているのか、入学後の指導は役に立っているのか、そして、大学生活と人生設計との関連はどうか、ということでお話をします。

まず大学入学以前の経験はキャリア形成に役立っているか、ということですが、中高までの就職指導、ボランティア、インターンシップの経験を尋ねたのがこちらの結果です。まず就職や生き方指導については、3年生よりも1年生のほうが、就職や将来の生き方について考える機会を与えられたと回答しています。全く与えられなかった、と回答する学生は、1年生3年生ともに1割前後に過ぎません。入学前のボランティア活動への参加状況では、3年生より1年生の方がわずかに参加経験者の割合が高い。入学前のインターンシップ参加の経験は、1年生が3年生よりも高い、という結果が見受けられました。

では、それらが、その経験がいまの自分に関連しているか、ということについてです。ここでは中高までの就職指導、ボランティア、インターンシップ経験が自分に影響を与えていると思うか、ということについて、かなり影響を与えている、まあまあ影響を与えている、ということの合算についての報告をします。中高までの就職や生き方指導については、自分に影響を与えていると答えているものは、1年生が3年生よりもやや高い傾向が見受けられますが、だいたい半数程度のものが影響を与えていると考えています。ボランティア活動、インターンシップ経験ともに、参加人数の割合はともかくとして、自分に影響を与えていると答える学生の割合は、それぞれ4割、あるいは45%くらいの学生が該当していました。

では中高までの進路指導というものと、自分の人生設計というものが、どれくらい関係しているのだろうか、ということについてクロス分析をしてみました。いつから将来の仕事や人生設計を考え始めたか。この結果は一番最初にお見せしたグラフなんですけれども。中学生以前から考え始めたという者、高校1、2年生頃、という風に、いつの時期から考え始めたかということ、中高までの進路指導からの影響を与えられたか、ということについて検討してみたところ、早くから人生設計を始めたと感じる者が、中高での進路指導の影響を強く認めていることが示唆されました。

ここでは、どうやら中高までの進路指導が自分に影響を与えたと思っている者は人生設計が早いということが考えられるんですけれども、では、人生設計開始は早い方がいいのか。ここでは、人生設計をいつ開始したのか、ということと、いま将来の見通しが持っているのか、ということとの関連を検討してみました。その結果、中学生以前から人生設計を開始したという者において、最も多く将来の見通しを持っているという割合が見受けられました。このグラフは、持っていると答えた者の割合を示しています。

しかし、より最近に近いところで人生設計を開始したものは、1年生と3年生を問わず、将来の見通しを持っている、と回答するものの割合が一段落ちる、ということが指摘されます。つまりこの結果からは、人は人生設計を開始してもすぐに将来の見通しを持てるようになるとは限らず、多くの者が安定して将来の見通しを持てるようになるのにおよそ2~3年くらいは必要となるのではないかと示唆されてきます。

同時に、将来見通しの実現への理解と実行というのはどの程度なのか、ということについてかけ合わせてみました。これも先ほどお見せしたデータですけども、およそ三分の一の学生は、何をすべきか分かるし実行もしている、と答えています。半数の学生は何をすべきか分かるが実行はできていない、と答えているわけです。1割強の学生は何をすべきかまだ分からない、と答えている。これらの結果は、将来の見通しが持てても、それに向けて実際の行動をしていくことがいかに難しいか、ということを示しています。

この見通しを持てた中で、さらに毎日の生活を作っていくことができるのか、ということと、人生設計の開始時期とのクロスをした結果がこちらになります。結果は、大きく二つを示しています。一つは、ここでも早くから人生設計を開始したものが将来の見通しに対して理解・実行していると答えている点です。つまり、中学生以前から人生設計を始めたものに理解・実行の回答者が多く、そこから多少の年数幅を持ちつつ、最近と答えた者に向かって、この割合は減少しています。これが1年生の推移になります。下になるにつれて、最近になってきています。そして、これが3年生の中で理解しているし実行していると答えたものの推移になります。ここからも、人生の設計時期というものが早い者であればあるほど見通しを持っていると同時に、理解・実行というものにもつながるのではないかと考えられます。

さて、大学におけるキャリア形成支援は役立っているのか、ということについてなんですけれども、ちょっと時間が押してきてしまいましたので、飛ばしながら行きたいと思います。

結果を先にいかせていただきます。キャリア教育・キャリア形成支援参加と将来の見通しの有無との関連、というところをご覧ください。これは、実際にキャリア教育やキャリア形成支援、セミナーとかに参加したのかということと、参加した者が将来の見通しをどれくらい持っているのか、参加しなかった者はどうであるのか、ということを示した結果になります。これをご覧くださいますと、1年生においても3年生においても、将来の見通しは受講した者の方が多く持っているようであることが窺えます。

ただ、キャリア形成支援受講者と非受講者を比べたところで、将来の見通しの有無というのが、あまり関係がない、という結果が3年生で見受けられます。この上の方の結果というのは、同じ3年生なんですけれども、こちらの、四角で囲った上の方は、キャリア教育、科目受講に関するものです。それに対してこの下の方、キャリア形成支援セミナーというのは、必要にかられて、あるいは見通しが持てないからこそ受ける、というようなものととらえられます。3年生において差が見られなかったのは、そのような切羽詰った者が受けた、というような背景があったのではないかと考えられます。見通しの理解・実行との程度の関連も大体同じような結果が見受けられました。

ちょっと次も飛ばしながら行きます。ボランティア、インターンシップ、参加型授業。明確にキャリア教育というわけではないのですが、実践や体験をしていく中で色々習得していこう、というような科目群があります。それらはどのように自分に影響を与えていると感じているのか、ということですけども。

こちらも、大体、まあまあ影響していると答えた者が、5割程度、6割程度見られた、という結果が見受けられます。ボランティアやインターンシップ参加で、将来の見通しの有無との関連についても、先ほどのキャリア教育受講と同じように、参加したもののものが多く将来の見通しを持てているし、理解や実行ということもできていることが見受けられます。参加型授業への参加についても同じ結果が見受けられました。

では最後になりますが、大学生活の過ごし方というものと、キャリア形成との関連、ということについてです。大学生活の重点については、先ほど報告したとおりですが、これについて、将来見通しの実現への理解・実行の程度と、大学生活の重点との関連をクロスさせたところ、理解・実行というものについては、特に一番多かった割合が勉強第一、というものでした。不理解・不実行については、全体の結果と同じく、何事もほどほどに、という風に答えたものが最も多くを占めておりました。ここから、理解もできているし実行もしている、というような

者は、勉強に対してもそれを非常に重要なものだと感じることができているのではないか。あるいは逆に、勉強に重点を置いている中で、理解・実行という道が開けたのではないか、ということが考えられてきます。

理解・実行群とはどんな群であるのか、というところに飛びます。この群の特徴というものは、勉強第一という学生生活観を持っていて、かつ将来とのつながりを見据えた勉強をしているのではないかと考えられます。同時に勉強時間も非常に多いということが見受けられておりまして、つまりは主体的に学ぶ意欲の高い学生像なのではないかと思われます。もちろん、ただ勉強してれば良い、というものではないわけですが、大学生生活に充実感を感じているか、という質問においても、理解・実行群が一番高い割合でイエスと答えていました。

つまりこの群は、将来への見通しを持っており、それと現在の生活とを有機的に関連付けることができおり、学生生活というものをキャリア形成において有意義なものとして組織化することができるのではないかと考えられます。つまり、自分が人生に何か目標をもつこと、それとの関連において日常生活を充実させたものにしていくこと、ということがうまくできているのではないか。今後このような群の形成をどうしていくのか、というところが焦点になるかと考えられました。

まとめです。大学入学以前のキャリア教育の意義としては、人生設計開始を早める。早くからキャリア形成に取り組む学生はそうでない者に比べて将来の見通しを持ち、その実現に向けて日々努力をしている、というように見受けられました。大学におけるキャリア教育の意義としては、将来見通しを持つのみならず、将来見通し実現の可能性を高めるようである、ということが見受けられました。同時に、ボランティアやインターシップ、参加型授業など、体験学習的な意味合いを含む授業においても同様の傾向が見受けられました。キャリア形成の程度と日常の過ごし方の関連については、将来見通しの実現に向けて理解・実行できているものの方が、主体的に勉強している傾向が見受けられました。

ここから、2種類のライフ、生活と人生という2つのライフを、有機的に連関させながら形成していくことが重要なのではないか。単に大学で勉強することが重要なのではなく、自らの将来、成長に向けて、何が自分にとって重要であるかを色々意味づけながら勉強することが重要なのではないかと考えられました。私からの報告は以上です。

●溝上

ありがとうございます。短い時間の中でどれくらい結果が皆様にお伝えできているかあやしいですけども。ただ、分析の仕方はいろいろあるのですけれども、私たちがこういう軸を持って分析した背景には、90年の終わりくらいに、2000人インタビュー調査というのをやったことがあります。結局2000人はできなかったんですけども、1200人くらいの大学生にインタビューをしたわけです(溝上慎一編『大学生の自己と生き方』ナカニシヤ出版、2001年参照)。

大学生に片っ端からインタビューをして一つ私たちが得たのはなんだったかという、将来を認識的に形成するということと、まあこれはキャリア教育とかキャリア形成の主テーマでもありますが、それと日常とを繋げることが本当に難しいんだ、ということでした。将来を作ることも難しいけれども、将来のビジョンが見えてきたときにそれが日常でどういう風にあわせていけるか。ここらへんもまた本当に学生たちには難しい。そういうテーマが今回の分析にはあります。またみなさん、調査報告書をゆっくりご覧いただければと思います。それでは、武内先生、よろしくお願ひします。

●上智大学総合人間科学部・教授 武内清

「大学教育、チャーター、学生の視点からの考察」

上智大学の武内です。専攻は教育社会学です。当日の配布資料として4枚配らせていただきました。最初に、今回の調査(京大・電通育英会「大学生のキャリア意識調査」)の内容に関してコメントさせていただきます。その次に、私たちの大学生調査の結果の一部ご紹介させていただきます。そして、それらのデータから見た大学教育やキャリア教育の課題を述べさせていただきます

今回の調査(「大学生のキャリア意識調査」)は、大変意義深い内容だと思います。現在、文部科学省や大学は学生に対する様々な施策や支援を行っています。しかしそれらは必ずしも、学生の実態を踏まえたものになっていません。そのような中で、政策や支援と学生の実態の乖離を埋める役割を、この調査は果たしてくれると思います。学生のデータをこのような全国規模で集めた調査は少なく、得られたデータは大変貴重で、またそのデータの分析も大変示唆に富んでいます。

私が今回の調査結果で感心し注目した点は、以下の3点です。

第1に、学生たちが大学に何を求めているかということです。学生は、専門的知識・技術の習得ということと、教養や視野の拡大、という2点を強く求めていることがわかります。

第2に、実際に生活の重点を見てみますと、一番多いものが何事もほどほどにということです。これは勉強だけではなく、クラブ活動、趣味、友人関係、資格、アルバイト等、さまざまな活動を組み合わせて、自分を試し自分の将来を見極めようとする学生たちの姿勢を感じます。

第3に、大学別とか専攻別によって、学生の意識やキャリア展望またその実行度も違っていることが伺えます。4年制大学と医学系薬学系の大学で、キャリア意識やその実行度に差が見られます。また、所属する学科や専攻が将来の希望を与えてくれるのかということに関しても、差が見られます。さまざまな点で、大学別、専攻別に見てみると、差が出ているのではないかと思います。

学生生活、キャンパス生活とかキャリアとか、そういうものが何によって規定されているか、ということを考え図式化してみました。単純に言えば、学生生活への影響の過去、現在、未来を区別してみたものです。

先ほどの中間さんの報告では、1を人生、3を生活という言葉で語られていたかと思います。そして今回の調査では、主に1の未来、キャリア展望との関係で、3の現在のことが語られていたのがこの調査の特徴かと思います。それ自身は、いまキャリア教育が大変重要視されている大学の中で重要なことだと思いますけれども、同時に、過去からの規定も重要です。これは、溝上先生もおっしゃってましたが、高校までの生活、高大連携とか、それからこれまでの家庭教育とか、小学校からのキャリア教育とか、そのあたりとの関連で、今の大学生活がどうなるか、ということも見てみる必要があると思います。

それと、さらに大きな影響としては、3の、現在の大学の様子、または大学改革の様子、教員の影響、さらには学生文化の影響、それから大学外のメディアの影響、アルバイトの影響、そういうものも、今の学生の生活、キャリア展望に与える影響があります。

この図式で言いますと、まず、親による社会化があります。親の属性や期待が学生に影響します。ファーストジェネレーションスチューデントという概念もありますけど、親の学歴であるとか親の文化資本が、学生の大学生活やキャリア意識の形成に影響を与えています。それから、ここでは学生の属性というふうに書きましたが、大学入学以前の学生の属性や経験(高校時代までにどういうことをやってきたのかなど)、学生の生活に影響を与えています。私たちの調査でも、高校時代に勉強しなかった学生は大学でも勉強しない、また、高校時代読書をしなかった学生は大学でも本を読まない、また高校時代までにデートした経験がないと、大学でもなか

なか異性と付き合えない、という傾向が明らかになっています。そのように、大学デビューというのは難しく、大学に入るまでのある程度の助走をしないと離陸できないということです。そのような大学入学以前との関連ということも、視野に入れる必要があります。

それから大学生活の中身のところですが、これは学生文化、教員との関係、サークル活動、アルバイトといういろいろ影響があるかと思います。中でも、学生文化の教育力には、大きいものがあります。今の学生たちが、友人と過ごす時間が大変多く、仲間からの影響をととも大きく受けています。

偏差値の大学に行きたいのは、その大学の教師の学識とか学問を求めてのことでない、そこには高い学力や知力の高い仲間たちがいるからだということだと思います。学校や大学は「半製品、集合材」(藤田英典)という言い方がありますが、その学校や大学の評価というものが入ってくる学生の質によって決まるという側面があります。そういう学生や学生文化の影響力というのはとても大きいと思います。ただ、そうはいっても教師の影響がないというわけではなくて、私たちの調査でも、教員の授業熱心が学生に様々な影響を与えています。学生が自分の大学の教師が授業に熱心だと思うと、授業への満足度とか、授業以外の様々な人間関係や大学全体への満足度が高まります。

この図は、私たちの21大学の調査で、学生が何に重点を置いているか(勉強、交遊、サークル活動)で、そのタイプ別に大学全体の雰囲気への満足度を見たものです。そうすると、はっきりした傾向が出ています。いちばん満足度が高いのは、勉強も交遊もサークルもやるタイプです。いちばん満足度が低いものはその全てにコミットしていない学生達です。その間に一つとか二つとかにコミットしている学生が位置しています。このように、大学というところが、さまざまな活動にコミットすることによって学生の満足度が高くなっていることがわかります。

以上はどちらかというと社会化のほうのモデルで申し上げましたが、大学教育の効果としては、社会化効果以外に、もっと大学チャーターとしての影響力が言われています。我々の常識として、大学の評判とかイメージとかそういうものの影響力も無視できないと思います。先ほど午前中の講演で、梶田先生がほとんど大学の授業には出なかった、ということをおっしゃっていましたが、梶田先生も京都大学の授業に出なくても、自分が京大生だという自覚を持ち、また周囲からそのように見られていることで、4年後には京大生らしくなっていたということがあったと思います。

このように、学生に影響を与えているのものは、大学の内外を含め、いろいろあると思います。

我々の調査では、調査した21大学を、入学偏差値、大学の伝統、大学の規模などで大きく4つの大学類型に分けて、学生の意識や行動の差異を検討しています。例えばこの図でいいますと、大学進学理由として、「将来について考えるために」は伝統総合大学で高く、「資格などを取るため」というのは新しい、偏差値のあまり高くない新興大学で多くなっています。伝統のある文系の大学は、一種のモラトリアムのところがあり、新興大学の方はもっとキャリアに特化した資格志向になっている、ということがわかります。

サークルの加入率は伝統大学で高く新興大学で低くなっています。大学満足度は、伝統大学の方が高く、キャリア志向の高い新興大学で低いという結果です。

まとめを申し上げます。京大・電通調査のようにキャリアとかキャリア展望から考えていくということは今大変重要になっていますが、それ以外に、大学入学以前の影響や大学の中の教師や授業や学生文化の影響も視野に入れる必要があります。それから大学類型とか専攻による違いの影響も考慮したキャンパスライフ、キャリア展望の分析が必要かと思います。

そのような中で、これからどのような大学を作っていけばいいとか、我々はどうのような学生支援をすればいいかというのは、今日お配りしたプリントの、3点ほど簡単に書きましたので、そちらを見ていただければと思い

ます。それは、「知を媒介とした人間関係」「モトリアムとしての大学」「コミュニティとしての大学」「学生の全人格的な発達、そのための大学の支援」ということです。ご静聴、ありがとうございました。

●溝上

ありがとうございました。それでは下村先生、お願いします。

● 独立行政法人労働政策研究・研修機構 キャリアガイダンス部門・副主任研究員 下村英雄 「大学生のキャリア形成論の本質的な問題とは何か」

労働政策研究・研修機構の下村英雄と申します。よろしく願いいたします。本日は、大学生のキャリア形成の本質的な問題は何かということで、少し大きな角度からキャリア形成の問題を、心理学の立場でお話をさせていただければと思っております。

大学生のキャリア意識形成については、本日、いろいろな部会、シンポジウムで話題になっていると思えますけれども、やはり基本的には、様々な社会的状況を反映した問題として捉えられる面があるかと考えております。例えば、フリーター、ニートに象徴される若者の不安定就労の問題というのは、こうした分野が盛り上がる一つの端緒となったと考えられます。また、それ以前に、高学歴化ということがずっと進んで、大学生が多様になってきたということも問題の背景になっていると思えます。さらに、90年代の不況期を通じて、産業界のより高度な人材ニーズが大学の側に直接寄せられるようになったということも関連があります。そうした社会的な状況を全て反映して、大学のキャリア意識形成の論点が影響を受けている、そういったことは確かにあると考えております。

ただ、そうは申しましても、大学生のキャリア意識形成には、こうした時代の影響に左右されない、より本質的な問題があるのではないかというのが今日の発表の問題意識になります。要するに、大学生のキャリア形成論に、きっと我々があまり普段論じないような何か本質的な問題点があるのだろう、なのでそれについて考えてみたいというのが、今日の私の発表の1つの狙いとなります。

手がかりといたしましては、先ほど中間さんの方からお話がありました大学生のキャリア意識調査 2007 ですが、この調査を見ますと、とても興味深い結果が随所に見られております。なので、まずは、それを引用させていただきたいと思えます。また、そのほかに私が参加しました調査がいくつかございますので、そうした調査結果もあわせて見ていきたいと思えます。いくつかの調査結果を重ね合わせながら、大学生のキャリア形成、特に意識面に焦点を当てた問題について考えてみたいという風に思っております。

さて、先ほど紹介のあった大学生のキャリア意識調査ですが、この調査で私が着目した点は、まず、大学生で「何をすべきか」といったことは自分なりに持っている学生が全体の7割となっている点です。つまり、大学生は将来の見通しを漠然とは持っているということが分かります。ですが、それでは具体的に何をするのかという「まだ曖昧だ」という学生が多くなっています。要するに、おおかたの大学生は将来の見通しを持ってはいる。しかし、それに向けてどうしているかとなると、何をすべきかは分かっているけれども実行はできていないというのが大多数になるというのが、1つの研究結果として得られていた、ということになります。

また、この調査では、「キャリア教育への参加」は将来の見通しと関連がありましたけれども、「キャリア形成支援」とはそういった関連はないという結果も示されました。ここでポイントになっているのは、キャリア教育は年間を通じた、単位を取れる、日常の授業に組み込まれた教育と、この調査では定義している点です。それに対して、キャリア形成支援は、いわゆる就職支援、3年生からやるような就職支援として、この調査では定義され

ておりました。要するに、普段、日常生活により近い授業の場面であるキャリア教育は将来の見通しと関連があるけれども、目先の就職支援につながるキャリア形成支援ではそうした関連がないという結果がえられていたということになります。

最後にもう1つ、この調査の着目すべき点として、先ほど申し上げましたとおり約7割の学生が将来の見通しを持っていると回答したわけですが、では現在、何をしたいのか、何を一番だと考えているのかというと、「まあまあ何事もほどほどに」というのが一番だったという結果になっていた点です。

こうした結果を総合して、掘り下げて考えると、要するに、どうやら学生の間では進路やキャリア以外にもっと気になることが何かあって、そのために何かしたいことはあるんだけれども、何をすべきかは分からないという回答になる。したがって、何事もほどほどに、いろんなことに手を出したいという回答になるのではないかと考えました。そこで、今度は、私が参加いたしました他の調査の結果を少しご紹介したいと思います。

今からご紹介する調査は、昨年9月に、都内の私立大学の大学1年生349名を対象に、今後、大学生活で力を入れてやっていきたい目標を自由記述で書いてくださいという調査になります。自由に、今後力を入れてやっていきたいと思うことを書いてくださいというシンプルな調査です。

その結果、「親友と呼べる友達を作る」とか、「授業で確実に単位を取る」とか、「毎日こつこつ勉強をする」とか、大学生はいろんな目標を書きこんだわけですが、その内容を集計いたしますと、トップ5というのが決まりました。まず、1位が友達や友人についてです。友達や友人を作るんだというのが1位。2位が、勉強、授業にきちんと参加するんだというものです。以下、サークル、授業、自分に関する目標が続いたという結果になっています。ちなみにこれは、2008年のキャリアデザイン学会で発表したもので、法政大学の現代GPの予算で行った八幡先生、梅崎先生、田沢先生と一緒にやった調査になっております。

さて、この自由記述結果をもとに、それぞれ質問項目を起こしまして、今度は、就職活動が終わった大学4年生にも同じようなことを質問項目で聞いてみようというのが、次の調査ということになっております。就職活動を終えた大学4年生1850名に調査を実施いたしました。ここでは重回帰分析という分析を行っていますが、就職活動がうまくいったのかどうかに影響を与える要因を特定することを目的とした分析になっています。その際、何をもちて就職活動がうまくいったとしたかということ、第一志望にきちんと内定が取れたかどうかということにしました。分析の結果、第一志望にうまく内定が取れたかどうかには大きな影響力をもったのは、勉強、授業、単位取得などをうまくやれたという思いだったということになります。このうまくやれたという思いを、心理学の方では自己効力感と呼んでいますけれども、勉強や授業そういったものをうまくやれたという思いを持っている、そういう学生が就職活動で第一志望を取れたという結果になっております。また、それよりも、もっと影響力が高いのが友人ということになっておりました。つまり、友人関係をうまくやれたという回答をした人が、第一志望に内定を取れたということになります。

少し意外な結果は、サークルやアルバイトなどの活動をうまくやれたと回答した学生は、逆に第一志望の内定を取れなかったという結果です。先ほど武内先生の方からお話があったかもしれませんが、もしかすると学外の活動に精を出し過ぎた結果、かえって第一志望の内定をとれなかったといったようなことが解釈としてはありうるかもしれません。いずれにせよ、一番影響があったのが友人、二番目が勉強、これが第一志望の内定をとれるかどうかには大きな影響を与えていたということなんです。

同じような調査をもう一つご紹介したいと思います。これはまた別な場所で、2004年7月に大学4年生506名に調査をしたものになります。ただ、分析はちょっと似ています。どういう分析をしたかということ、7月時点でまだ就職活動をしている学生と、もう内定は取ったから就職活動は止めたという学生。これを就職活動がうまくいったかどうかの指標にしたということになります。これは、就職活動をもう終了した学生は、第一志望もしくはそ

れに近いところに内定を取れたので就職活動をやめたという学生です。それに対して、7月時点でまだ就職活動をやっているという学生は、まだ就職活動に納得していないからやっているという解釈ができます。そこで、7月時点で就職活動を行っているか否かを就職活動がうまくいったかどうかの指標としました。

さて、どこに違いがあったかですが、まず就職に向けて努力した事柄が全然違うということが分かりました。早く内定が取れた学生というのは、自分でプレゼンテーション能力を高めようと思ったし、人間的な魅力を高めようと思ったし、情報を収集しようと思ったし、人脈を広げようということに努力をしたというふうに回答をしています。なお、ここで言及している結果は、全て統計的に有意差があるものです。

そのほかに、随所で、早めに就職活動を終えられた学生とそうでない学生では調査結果が違うということが随所で観察されました。代表的なものを申し上げますけれども、大学時代に身に付いたと思う事柄は何かという意識でも、就職活動が早く終わった学生は、人脈形成能力、これが身に付いたと回答している。また、状況の変化に柔軟に対応する能力も身に付いたと回答している。以下、自己表現力、人間関係を円滑にする力、熱意意欲を維持する力などが上がっているということが分かります。

先ほどの調査結果と似ているのですけれども、人間関係や人脈といったものに対する意識がちよっと違っているというのがお分かりいただけるかと思います。また、これも少し対人関係の指標になるかと思って結果をもってきましたけれども、友人から自分はどう思われているかという点も調査いたしました。これも就職活動が早く終わった学生は、自分は元気だと思われている、勉強が出来ると思われている、明るいと思われている、どんなことにも一生懸命だと思われている、というふうに回答しております。こうした結果にはいろいろ解釈があるかと思いますが、就職活動が早期に終了した学生というのは、自己概念、また他者から見た自己概念というのが、かなりポジティブであるということが言えるのではないかと思います。

では、もっと直接的に自己概念を聞いた結果はどうなるかといいますと、就職活動を早く終わった学生は、他人に対して自分の意見をはっきり言うほうだ、グループの中心になって他人を引っ張ってこうとする方だという結果が示されました。また、こういったリーダーシップ関連のほかに、自分は雑用を早めに片付ける方だ、10分や20分の空き時間をなるべく有効に使う方だ、誰かが困っているのを見たら進んで手助けをする方だ、という面でも値が大きい。概して自己概念がポジティブで、かつそれが何か競争主義的な、自分だけよければいいというのでもなくて、むしろ誰かが困っているのを見たらすすんで手助けをする方だと答えるのが就職活動を早く終わった学生だという結果も、興味深い結果として得られています。

逆に、この調査結果で、就職活動が終わっていない学生の方が点数が高かったのは何かといいますと、自分はどのように生きるべきかと悩むことがある、という項目です。これだけは就職活動がまだ終わっていない学生で高かった。調査全体を通じて、就職活動未終了の学生が値が大きかったのはこの項目だけだった、ということになっています。

ここからの解釈はいろいろあると思うのですが、私のほうでは次のように解釈しております。要するに、大学生にとってキャリアや将来の問題というのは、日々の授業であったりとか友人であったりとかサークルであったりとかそういうものと分かちがたく結びついている。むしろ、きっとその延長線上にあるものなのだろうということだと思います。

ですので、先ほど申し上げたように、例えば10分20分の空き時間があれば有効に使うんだとか、そういった細かい日々の日常生活の出来事、大学生の日常生活に交わる個人的で小さな出来事が、恐らく大学生にとっては大きな問題であり、キャリアにつながる重大な要素になっているのではないかとというのが私の解釈だということになります。

それに対して、先ほどご覧いただきましたように、就職活動が終わっていない学生というのは、何か心のどこ

かで引っかかる問題がある、常に何か細かい気になることがあって就職活動で一步を踏み出せずにいるという解釈ができるということになります。

少しキャッチフレーズ的にまとめますと、要するに大学生にとって解決すべき本質的な問題というのは、大学生が日々送っている日常生活なのだろうということです。ここは今回のフォーラムの中でも繰り返し様々な発表者の方やそのほか講演者の方、色んな先生方がご指摘されていると思いますけれども、日常生活をうまく送ることが大学生の中で大きな原則としてあるのだろうというのが、今日の私の発表の一つの大きな趣旨と申しますか、申し上げたいことということになっております。

大学生のキャリア形成論というと、何となく常に職業やキャリアの問題だけ切り離して論じがちになる。特に、労働職業サイドからこういった問題を考える際には、職業やキャリアの問題と個人的なパーソナルな問題というのは全く別物で、常に職業やキャリアの問題だけ考えていれば何とか解決策は見つかるのではないかと考えがちになります。しかし、そうではない。様々な調査結果を含めて解釈しますと、やはり職業やキャリアの問題とパーソナルな問題というのは、引きはがすことができないほど密接に結びついている、そういったことが言えるのではないかと、というのが私の主張です。

大学生にとっての将来のキャリアというのは、個々の日常生活と分かちがたく結びついていて、その点、個人的である。ただ、それゆえに社会的なんだということです。社会的な問題として大学生のキャリアの問題は扱われていますけど、その背景に極めて個人的な問題というのが伏在しているんだ、そういったような解釈ができるかと思っています。

この点から派生して、ちょっとお話を付け足します。スライドにはありませんけれども、先ほどの大学生の生活目標に関する自由記述ですが、あの自由記述を分析していて、実はとても興味深い回答がありました。それは、例えば朝起きるとか、徹夜しないと、自炊するとか、こういった生活面でのことも結構な割合で書かれているという点です。ご来場の皆様も、多分ご自分の大学生時代を振り返って思い出されると思うんですけど、こうした朝起きるとか、徹夜しないと、授業に必ず行くんだという、こういう些細な生活上の目標が、今年はこの力をいれて頑張るといった年間の最大の重大目標であった、そういう年頃があったというのではないのでしょうか。

他にも、サークルで最近自分は人気がない、昔は人気があったのにと、自分のことでなくても、あの子は全然異性の前では態度が違うとか、そういうことが気がかりで気がかりでしょうがない年代、そういう年頃の時代があったのではないかと、という風に思います。おそらく、そういう個人的な問題というのがとても重要な時期が青年期というものであり、その青年期の真っ只中にいるのが大学生なんだろうというのが、とても重要なポイントだと思うのです。

こうしたお話を申し上げますと、そういう個人的なことばかりに焦点を当てるのではなくて、もっと社会的な側面から、社会的な問題として考えたらどうなんだ、というのを批判としてよくいただくのですけれども、その点については私も全くその通りだというふうに思っております。例えば職業の社会的意味であるとか、労働者としての権利であるとか、法律的な知識であるとか、そういったことを青年に情報や知識として提供する。これはもちろん重要なことで、どんどんやればよいと思うのです。ですが、おそらく、こうした社会的な問題意識さえ与えればそれで話が済むということにはならないと思います。逆に、それで話が済むのであれば、むしろ話は簡単だと思います。たぶん、それだけでは大学生のキャリア形成、もしくは大学生のキャリア意識の問題というのは済まない。もっと根深い問題が個人の側に隠されているのだろうという風に感じております。

例えば、大学生のキャリア意識というのはもっと個人的で、友愛的で、更にいえば、性愛的でさえある。これは、今日の発表のスライドの中には含めていませんが、大学生のキャリア意識は、異性関係であるとか、そ

った問題と結びついている可能性も、様々な調査結果からは伺えるような時代になってきております。

今日こういったことについて細かく論じる余裕はないのですが、例えばフリーター・ニート研究の成果などから、キャリア形成と家族形成の問題というのが根深く絡んでいて、そうしたことによってなかなか最近の若者の家族形成およびキャリア形成というのは難しくなっている。こうしたことは、現在、一般的に指摘されるようになってきています。さらに、社会を揺るがすような大事件の背景に、例えば自分は異性経験がないであるとか、異性から選択されないといったことが本人のキャリア意識に微妙に影を与えていたという事件を、みなさんの方でもニュースや新聞でご覧いただくことがあると思います。

おそらく、そうした意味でも、個人的であるがゆえに社会的であると言えるのだと思います。この言葉は、もともとジェンダー研究のほうで有名な言葉だと思いますけれども、ここまできると、ジェンダー研究で使われる本来の言葉の意味とどんどん似てくる面があります。個人的な側面、友愛的な側面、性愛的な側面。こういったものが、この年代のキャリア意識形成に根深く絡んでいる可能性が高い。そうしたことを付け加えたいと思っております。

お話をまとめさせていただきたいと思います。今回のフォーラムで主に取り扱っております、就職支援、キャリア教育、正課教育、これら3者間の関係について一言申し上げて終わりにさせていただきたいと思います。

正課教育は、これがやはり大学生にとっての日常生活ということでありまして、私の今回の発表に重ね合わせていいますと、これと分離した形でのキャリア教育というのは、多分に学生にとっては無理があるだろう、距離があるだろう、というのが一つです。ですから理想的には、これも様々指摘されていると思いますが、キャリア教育的な視点を、大学生の日常生活である正課教育の中に織り込んで、日常生活の中に将来のキャリアが織り込まれている、そういった形で提供するものが、大学生の実情にあった基本的な方向性なんだろうというふうに考えております。

そして、こうしたベースができている場合には、例えば履歴書の書き方から、自己ピーアールの仕方、面接の受け方、そうしたことにまでつながるテクニカル・プラクティカルな就職支援も、大学生にとって有益となる。就職支援も、キャリア教育においては不可欠な要素ではあると思いますけれども、正課教育とキャリア教育が大学生の日常生活にぴたっと合った形で展開されていけば、恐らく就職支援というのも大学生にきちんと響く形に提供することができると思います。

これも我々の調査の結果から明らかになっていますが、大学のキャリアセンターなどで就職支援を提供しようとしていろんなことをやっても、なかなか大学生の参加率が低くて困るということが全国各地で悩みの種になっていると思います。ですが、もっと大学生の日常生活、普段の生活のレベルまで下りていって、そこから問題を掘り下げるといふか掘り上げるといふか、そこまで下がっていって問題を吸い上げて、就職支援といったものを展開すれば、恐らく大学生にとっても響くようなキャリア教育が展開できるのではないのでしょうか。これが、本日の私のほうからのまとめということになります。

今回の調査結果から、いろんな解釈が可能だと思いますので、みなさんの方でお気づきの点がございましたら、また後ほど教えていただければというふうに思っております。どうもありがとうございました。

●溝上

下村先生ありがとうございました。ポイントとしましては、下村先生のご所属は労働政策研究・研修機構でありまして、どちらかといえば社会的な政策とかそういうことが彼の周りでは多くあります。そういう中で彼が、今回は学生ですが、学生の日常生活とか個人的な問題を強調される、ここが私はポイントではなかったかと思っております。それでは時間も押しておりますので浅野先生、よろしく申し上げます。

● 東京学芸大学教育学部・准教授 浅野智彦

「大学生の人間関係と進路意識」

東京学芸大学の浅野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私はパワーポイントは使わずに、紙ベースで報告をさせていただきます。

本日の登壇者のお三方と比べまして、キャリア教育とか大学生研究ということでいいますと私は完全な門外漢でありまして、やや不安に思っているところなのですが、なんとか他の先生方の報告とうまく噛み合わせができるといいな、と思っております。

それではお配りました資料の一番目のところからいきたいと思います。今回の大学生調査、これを拝見させていただきまして、大きな意義がどこにあるかという、やはり何度か説明がありましたように、大学生のライフ、生活というものを、生活という局面と人生という二つの局面に分けたところだと思うんです。私自身がやってきました、若者の人間関係、対人関係、特に友人関係の研究、そういった文脈にそれをひきつけて捉えなおしてみますと、若者が持っておりますソーシャルネットワーク、パーソナルネットワーク、ようするに人付き合いですね。人付き合いの二つの側面に、生活と人生という二つの用語が対応しているのかな、というふうに感じているわけです。

すなわち、一方が親密な友達や親子関係が典型ですが、親密な他者との関係からなるような領域、これを親密圏というふうに呼んでおきたいと思います。もう一つが、親密ではないような、しばしば見知らぬ他者との関係からなるような領域、これを公共圏と呼んでおきます。この二つの領域に若者の人間関係を、二つ位相に分けることができると思うのですが、それぞれと生活、それから人生という言葉が対応しているように思うわけです。

後者の公共圏なのですが、これはもう少し説明しますと、例えば価値観であるとか好み、趣味、あるいはライフスタイルなど、そういったものの共有をあてにできないような関係。つまり趣味が同じだったらわりと話が通じてしまうところがあるわけですね。そういう、何かを共有しているがゆえに多くを語らずとも通じてしまうところがあるような関係ではないような、そういう関係の領域だという風に考えていただきたいと思います。最も、これに公共圏という言葉をあてるのがいいのかどうか、そこは議論の余地があるかと思いますが、ここでは暫定的に、親密圏と公共圏と、二つの位相を分けておきたいと思います。

そこで、今日の私の報告では、親密圏と公共圏、それぞれについてこれまでどのようなことがいわれていたのか、言われてきたのか。特に社会学的な研究の中でどんなことが言われてきたのか、ということをざっと確認したうえで、今回の大学生調査のデータを少しだけ独自に分析をしてみたい、とこう思っているわけでありませう。

レジュメの二番ですが、親密圏のお話をしたいと思います。親密な関係といえば色々ありますけれども、ここではその典型として、友人関係に注目してみたいと思います。よく言われるのが、友人関係が若者においては希薄化している、ということなんですね。しかし、比較可能な時系列データのどれを見ても、大体友人関係というのは濃密化しています。例えばここに上げましたのはその一例にすぎないのですが、内閣府が計時的に行っています調査のデータであります。すなわち、充実感や生きがいを感じるのはどんなときなのか、という質問に対して、友人や仲間といるとき、と答えた若者の比率が80年代以降一貫して上昇しているということですね。ちなみに、最新の調査でちょっと下がっているように見えるのは統計的誤差の範囲内でありまして、いわば高止まりしている、というふうに見るのがいいのかなと思います。

同じく、友人関係の満足度についても同じことが言えます。実はこれは多分、満足している、と、やや満足している、とを両方あわせてしまうと9割を超えているんですね。もうほとんど上限に達してしまっているわけです。他にも、悩みごとを誰に相談するか、といったときに友人を挙げる者の比率の上昇であるとか、休日に友人と一緒に過ごす者の比率の上昇であるとか、様々な時系列で比較できる調査を見ますと、友人関係は希薄化しているのではなくて、逆に濃厚化していると見るべきなんだろうな、と思います。これがまず第一点目に指摘しておくべきところだと思います。

その濃厚化の中身なのですが、この濃厚化の中身につきましては、なかなか調査が難しいのですが、傍証としまして、これも内閣府が行っているものですが、ちょっとこれは最近の調査ではないんですけども、内閣府が定期的に『情報化と青少年』という調査を行っております。最新のものはまだ紙媒体のものが出版されておりませんが、最新のものの一つ前の調査で、このような項目が尋ねられています。メールを利用する人たちに対して、その利用用途はいかなるものか、というものです。もちろん、用件電話的な、待ち合わせの場所の確認とか、遊びに行こうよという誘いであるとか、そういったものも多いのですが、たわいのないおしゃべり、相手とのおしゃべりというものがかなりの比率を占めている。すなわち、若者の友人関係は、何かテーマをもった、例えば熱血スポ根ドラマのように何かチームを作って試合に勝つ、といったような、何かテーマを持って目的を設定してそこに向かって邁進する、というようなものではなくて、むしろ、ただ一緒にまったりいるのがいい、ただおしゃべりをするのがいい、そういうような関係に変わってきているのかな、というふうに私は見ております。

このことを濃密化に対して、即時化、というふうに呼んでみたいと思います。即時的であるというのは、つまりは手段的ではない、ということです。何かのために一緒にいるのではなくて、一緒にいること自体が楽しいので一緒にいる、ということです。実はこのような傾向を指摘しているのは私だけではありませんで、多くの人たちが若者の友人関係はこの意味での即時化を強めていると言っております。色んなキャッチフレーズがありますが、最も有名なのが、北田暁大さんがおっしゃった「つながりの社会性」というものですし、あるいは鈴木謙介さんがおっしゃった「ネタ的コミュニケーション」ですね。ネタ的コミュニケーションというのは、コミュニケーションが続きさえすればその中身は何でもいい、場面に応じて全然逆のことを言ってもかまわない、だから、内容に矛盾があってもあまり気にしない、とにかくそこが面白くて盛り上げればオッケー、というような感じのコミュニケーションということです。

しかし、逆にこういう関係が一旦うまくいかなくなると、修復は大変に難しいんですね。ノリで動いていく、ノリで流されていく関係でありますから、この場合、ギクシャクし始めると、これを修復するのはかなり難しいことになります。ですから、濃密性と即時性が進めば進むほど、うまくいかなかったときの苦痛も増大する、上昇する、ということになると思うのですけれども、このことを指して、土井隆義さんは「友達地獄」と呼んでいるのだろうと思うわけです。

以上、濃密化と即時化というのが、現下の若者の友人関係を特徴づける二大トレンドなのではないか、ということをお話しました。ちなみにこの場合、若者と大学生はどのくらい違うのか、という話があるのですが、現在は同年齢人口の約半数が大学に行くんですね。去年でしたか、大学生協連合会という生協の連合組織がありまして、そちらに呼ばれて、大学生の友人関係というテーマでお話をすることがありまして、その際に、私が持っているデータの中から大学生だけをピックアップして、そのトレンドを大体確認したことがあるんですね。そうすると、一般の同年齢の若者の傾向とそんなに大きくは変わらない。だから、いまや、若者論と大学生論というのは、徐々に収斂しつつあるのかな、という印象を持っております。

3番目の公共圏の話に移りたいと思います。公共的な人間関係についての研究はたくさんあるんですけども、その中からここでは二つのことを指摘しておきたいと思います。まず一つ。見知らぬ他者との関係ですね、

そういうものを含んだ関係の領域、公共圏が、政治的な市民性、シチズンシップの涵養にとって重要な意味を持つ、ということです。これは日本でもここ数年流行っております、社会関係資本論と呼ばれる理論に基づいて調査をやってらっしゃる方々が一貫してよくおっしゃることですね。

要するに、二次的結社。二次的結社って日本語としてはなじみませんが、ボランティア団体であるとか、趣味のサークルであるとか、そういった集団です。そういう集団に参加することが、政治的に成熟した市民を作り出す効果を持っている、というわけです。一つには、そういった結社に参加して見知らぬ他者と接近することによって、社会を構成する人たちに対する一般的な信頼が醸成されるということがあり、他方で、そういう自分と価値観の違う人たちとうまく折り合って何かを決定したり、一緒にやるという、その作法を身に付けるということがあります。その二つの意味で、二次的結社への参加が政治的に成熟した市民、ようするに政治的シチズンシップとここで言っているのはそういうことなんですけど、そういうものを涵養する効果がある、ということがいわれます。

二つめのほうが多分今回のパネルの文脈においては重要だと思うのですが、そういう公共圏へのアクセスですね、見知らぬ他者へどれだけチャンネルを持っているか、ということが、実は、移行過程にとって極めて重要な意味を持っているんじゃないか、ということが最近言われています。つまり、公共圏になるべく多く回路を持っていること、公共圏にコミットしているということが、社会経済的な地位の達成に有効である、逆にそういうアクセスが欠如している、そういうアクセスを持っていないということが、地位達成に非常に不利に働くという研究結果が、ここ数年の間に積み重ねられてきました。

なぜそうなるのかという理由については、色んなことが言われていますけれども、代表的なものを3つ挙げますと、一つは相談相手の範囲が狭まってしまうと情報が入りにくくなる。つまり身近な友人関係だけキープしようとしてしまうと、身近な友人関係の中で新しい情報は発生しないんですね。むしろ、身近じゃない人の方から新しい情報は入ってきますので、相談相手として身近な人間関係だけじゃない、遠い、よく社会学では強い紐帯と弱い紐帯という言葉を使いますが、弱い紐帯。あまり会わないし、そんなによく知らない人なんだけど情報をくれるような、そういう人との関係をキープすることが、社会経済的な地位上昇のために有利な情報の入口になるだろう、と。逆にいえばそれがなくなれば、非常に不利な地位に置かれてしまうのではないかと、という説明がされます。

二つめがロールモデルですね。身近な他者の中には大体自分と似たような人しかいませんので、多様なロールモデルがなく、自分が今いるところから抜け出そうとする動機づけ、こういう風にすればいいんだというようなモデルがない、そういうような説明がなされます。

三つめに、強い紐帯はそれはそれで非常にありがたい側面もあるのですが、そこに依存しすぎるとそこから抜け出せなくなる、ということですね。私自身、地方の都市に行って若者にインタビューをしてみると、みんな、この町にずっといたい、と言うんですね。なぜか、と言うと、友達がいるから、と言うんですね。あと、家族と親戚がいるから、なんですね。つまり、身近な人間関係の中に埋め込まれてしまっているんですね。

だから、バイト先もないような経済的に苦しい場所でも、そこから動こうとしない。友達と一緒に遊べなくなるから。逆にそういうところにいれば、友達とか家族とか親戚とかのネットワークにつながっていることによって、そこそこ生活は成り立つんですね。短期間ですが。長期的には無理だと思いますが、ある程度、数年間はそこでやれてしまうんですね。だから抜け出せなくなってしまう。狭い範囲の強い紐帯に依存することで抜け出せなくなるということは、つまりそういうことを意味しております。

そこに表を示してありますが、これは私のデータではありませんで、下村先生がいらっしゃる労働政策研究・研修機構による高校生調査のデータを堀有喜衣さんが分析したものです。相談相手が多ければ多いほど正

規雇用につきやすいという、そういうことをその表から読み取ることが恐らくできます。

やや駆け足ですが、最後に、今回の大学生調査の結果をそれなりに、いままでの話をふまえて、私なりに分析をしてみたいと思うんですね。私の関心は、こういうことです。今言った、親密な関係と公共的な関係とに二つにざっくり分けてみたときに、それぞれの関係は進路意識にどういうインパクトを持っているのか、ということなんですね。本当はもう少し細かい分析をしてからこういうことをやるべきなんですけど、時間もありませんでしたので、ごく単純な分析をやります。

これは、第一次近似だから、これからもっともう少し細かく見て洗練させていかなければいけないような分析だという風に、一応眉に唾を付けてお聞きいただきたいのですけれども。ここでは、被説明変数と説明変数をそれぞれ以下のように設定して重回帰分析というものを行っています。重回帰分析というのは、いくつかある要因のそれぞれが独自にどういう効果を持っているのか、ということを知るための分析手法です。

で、被説明変数、つまり何を説明しようとしているかというところで、ちょっとみなさんの手元に調査票がないので、少し参照が難しいと思うのですが、Q13 というところで将来設計に関する意識項目を 5 つ尋ねています。私は大体将来設計がある、とかですね、将来のためを考えて今から準備していることがある、とかですね、そういったことを 5 つ聞いています。この 5 つを主成分分析にかけると、ほぼ一つになりますし、それからこの項目感の関連の度合いも、いわゆるクロニバックのアルファというやつを見てみますと、それなりに高いんですね。なので、ちょっとそういうテクニカルな話は全部置いておいて、足し合わせて一つのスケールを作ります。足し合わせる際に、逆転項目があるので逆転させなければならぬとか色々細かいことはあるのですが、その辺の説明は全部省いて、このQ13の5つの項目から、将来設計積極度、とでもいうべき意識スケールを、意識得点を作ります。この得点の高いとか低いとかいうことを、一体何が決めているのか、ということを探るわけですね。

それで、どういうものを候補として、いわば容疑者としてピックアップするかというと、そこに書いてあるものです。まず一つは親密圏の話です。親密な関係に関わる変数として、友人関係を重視する度合い、友人づきあいに費やす時間、それから親の関与、ですね。親に関する変数は、実は当たり前といえば当たり前なんですけど、色んな調査を見ますと、私が昨年やった調査でもそうなんですけど、母親が効くんですね。母親の学歴が結構明確に効くことが多いです。ですから、本当は今回の調査でも、父親母親の学歴を聞いていればそれを変数として投入するところなんですけど、今回はそれはありませんでしたので、親がどれくらい子供の進路に口を出してくるかというその度合いを変数として投入しています。

二つめは、今度は公共圏に関する質問項目でありまして、これも難しいところがあるのですが、ボランティアへの参加経験とインターンシップへの参加経験をそういったものの指標として投入してあります。この指標をそういう意味で投入することが果たして適切なのかどうか、というのはもう少し検討してみなければ分からないところもあるのですが、一応暫定的にそういうものとしてここでは分析に使いたいと思います。

三つめが、それ以外に、大学の教育がどういう効果を持っているかということを知るために、キャリア科目の受講非受講と、キャリア講座の受講非受講を投入します。最後に、コントロール変数といいますが、基本的な属性として、学年と性別を投入します。

その結果として出てくるのが、一番最後にある表の 2 です。ちなみにこの分析からは、医学系薬学系 6 年制大学に在籍する学生は除いてあります。これは先ほどの武内先生のお話にもありましたように、6 年制大学に在籍する学生さんの進路意識はかなり特殊なんですね。なので、平均してしまうと傾向が見えにくくなりますので、これは除いて分析してあります。

例えば何が違ってくるかという、医学系薬学系 6 年制大学に在籍する学生も全部入れて、全てのサンプルで同じ分析をしますと、一番最後の行に書いてあるキャリア講座の受講がマイナス効果を持つんですね。か

なり明確な。どういうことかという、医学部薬学部に在籍しているにも関わらずキャリア講座を受講しにくるということは、相当に進路において混乱が生じている、ということなんですね。だから、ものすごく明確に進路意識ができていない人たちというのは、ちょっと特殊なグループなので、ここでは分析から外した方が全体の傾向が掴みやすいと思いましたので、それは外してあります。

その結果、将来設計積極度を上げる項目というのは、友人関係なんです。これは実は先ほどの下村先生の分析にもありましたけれども、友人関係を広く良好にもつということが、進路意識をポジティブにする。進路・将来設計に関する積極度というか意欲を高めるという関連があるんですね。友人関係を積極的にしたから、進路意識が高まったのかどうかは分かりません。ただ、二つの間には明確な関連がある。その関連がこれを見ても一番強いんですね。先ほどの下村先生の分析でも、友人関係が一番明確な効果を持っていましたが、ここでも同じことが言えます。

逆に、ボランティアに参加するということは、効果を持っていません。これは中間先生の分析とはやや矛盾するところなので本当はもう少し踏み込んだ分析が必要かと思いますが、ボランティア参加経験は将来設計積極度に対してはポジティブな効果もネガティブな効果も持っていません。インターンシップ経験は持っていません。それから、キャリア科目の受講も持っていません。ただし、キャリア講座の受講のほうは、あまり効果を持っていない。プラスにもマイナスにも特に有意な効果はもっていない、と言えるかと思います。

そうしますと、友人関係、親密圏に閉じこもっていて、公共圏の関係を持っていないと、移行過程に失敗しますよ、というこれまでの議論とは少し違った結果が出てくるんですね。なので、ここから先の研究テーマとしては、一体どういう友人関係がどんなふうな効果を持っているのか。友人関係といっても色々あるんですね。だから、どんなタイプの友人関係がどんなタイプの効果を持つのか、といったことのもう少し詳細な分析が必要になってくる。そこがわからないと、支援をしようと思ってもしにくい、支援のしようがない、というところがあるのかと思います。

少し時間をオーバーしてしまいました。以上が、私の報告でした。ありがとうございました。

●溝上

浅野先生、ありがとうございました。それでは、残り時間短いですけれども議論をしていきたいと思っておりますので、ご報告いただいた先生、前へお願いいたします。

中間先生は私の身内みたいなものですので、残された時間で、どちらかといえばお三方の先生方に質問を一つずつしていきたいと思っております。

お三方とも、私の期待以上にご報告してくださいまして、内容に関しては勉強になることばかりで、本当に、これで私の役目は今日終わったなと安堵しているんですけども。特に武内先生の、私が今日聞いて勉強になり、改めて確認したのは、やはりその、高校時代に勉強していない学生は大学でもしない、と。勉強というのは何も授業で真面目に勉強する姿だけを指すものではありませんけれども。ただ、社会とつなげたときに、やはり学生時代に勉強している、していないが、将来力強く勉強していくことにつながるな、と卒業生を見ていて思うんですね。

そういうあたりを、私なんかは、先生のお話を聞きながら課題として持たないといけないんじゃないか、と思いました。つまり、例えば京大なんかを見たら分かりますけれども、学生時代に、高校生時代にどれくらい勉強してきたか、大学は大学の状況というものがあって、目の前の必要に迫られた課題だったらやるけれども、なんかよく分からない勉強はしない、とかですね、あるいは、まあそういうところにそれこそ下村先生じゃないですけど、日常の態度というのがいろんな場面で現れると思うんですね。そういうあたりが、将来の職業なんかとどう

関係するのかっていうのは私はこれからちょっと、もうちょっと焦点を当てて勉強していかないといけないと、聞きながら感じました。これは感想です。

それで、武内先生に一つ質問と、浅野先生と下村先生にはまとめて質問させていただきますけれども。武内先生のご報告のなかでいくつも示唆的な点はありましたけれども、私が短い時間の中で一つ取り上げようと思いましたが、図4の、学生タイプと大学全体の満足度ですね。勉強と交遊、サークル、非常にバランスよく活動している学生が非常に満足度高い、とこういう報告がありました。で、この結果に学部やランクの差があるとして、それは大学教育の実践にどういったインプリケーションを与えるのか。そこをお伺いしたいと思います。つまり、調査というのは、大学の種類、学部、いろいろ分析をしていけば差が必ず出てきます。しかし、差＝実践へのインプリケーションではない。そのあたりのお考えを教えてください。と思います。

下村先生と浅野先生、これは武内先生にも絡むことですが、お三方のご報告を聞いて、私が今日一番確認したのは、やはり友人関係といいますか、対人関係の影響力ということ。それを、いろんな違った立場から強調されたと理解しました。浅野先生の最後のご報告は本当にありがたかったと思いますが、単に友人関係が効いている、という調査分析の話ではなくて、その友人の中にも親密圏と公共圏と二つある、と。

親密圏は多分大学教育の組織的な取り組みでは扱っていけない領域だと思いますが、公共圏に関しては大学が組織的に考えていくときに絡めていけるところだと私なんかは思います。特に、公共圏の定義自体が、日常の友人関係を越えて新しい関係に開かれてゆくということですから、そういう場づくりを大学が関与できるか、というのは今日得た一つのインプリケーションだと思うんですね。

下村さんの、ここでは報告されませんでしたけれども、以前のある論文でも、例えば就職活動一つとっても、OBOG、自分たちの知っている他者ではなくて、大学を介した関係はありますけれども知らない卒業生OBOGに、積極的にコンタクトをとって情報を得て自分の人生を考えていくということが就職活動に大きな影響を及ぼすと書かれていました。こんなことを例えば大学教育全体がどういう風に考えていくか、というのは私なんかは非常に興味があるわけです。

なぜこういう接続をするのかといいますと、友人関係が大学教育の、たかだか学習の話一つをとっても、非常に背後で効いているという話はアメリカとかオーストラリアの研究者から何度も出てくるんですね。日本では難しいですけども、寮の部屋構成で多様なバックグラウンドを持った学生たちをまとめていく、そういう人間関係が豊かな大学生活のみならず、学習活動をも促していく、そういう話は一つの例です。また、これはオーストラリアの先生から聞いた話ですけども。例えば授業でディスカッショングループを作っていくときに民族の違いを考慮する。オーストラリアでしたら、母語の英語の学生たちが半分いて、他方で海外からの留学生がかなりいて、語学のあるいは民族的バックグラウンドの違いが授業を難しくさせているわけです。そういう種々の条件を考慮して学習共同体を大学側がつくっているいろいろな学生を交わらせていく。

で、ご質問する部分は、第二部がキャリア教育へのインプリケーションということでもありますので、そこに繋げる意味も込めて、例えば友人関係とか対人関係が重要だというその先に、特に公共圏ですよ、大学教育が組織的に何か関われる、あるいは何か提供できる場、というのを何かお考えになっているか。そういう点でもしあればお聞きしたいと思います。それでは武内先生からよろしくお願いします。

●武内

うまく答えられるかどうか分かりませんが、この調査結果を実践の方にどう生かしていくか、ということも関係があると思います。中間さんのご報告で、この調査からキャリア意識をきちんと持っていることが大事、そのようなキャリア教育を大学が行なっていくことが大事という結論が出ていたと思います。そのことに関しては、

基本的には賛成です、私も上智の学生を見ていて、しっかりしたキャリア意識を持った学生が良い就職を得ています。

では、今の大学全体をそういう方向に持っていけばいいのでしょうか。今回のデータでは、医学部とか薬学系の学生が、しっかりしたキャリア意識を持っていて、そういう結果を出しているのではないかと思います。医学系とか薬学系とか、大学生の中のエリートの部分ではそれはいいかもしれないけれども、私たちのデータでは新興大学といわれる、元々もうちょっと専門学校に近いような大学、福祉系であるとか保育系であるとか、そういうところの学生は資格を取りたいということで、将来のキャリアもはっきりしていますし、そういう勉強をしているんですけども、そういう学生のデータを見ますと、あまり大学生活全体には満足していません。いろいろ不満があります。先生方は一生懸命やっているんですけども、学生の大学満足度に結びついていません。これからの大学というのはそういうある意味で専門学校型に全部行くべきだと考えていいんだらうかという疑問が、これらの学生のデータから感じます。やっぱりそういう学生も、大学に入ったら自分の可能性を色々試したいのではないかと。溝上先生がアウトサイド・インからインサイド・アウトということをおっしゃっています。自分が何をやりたいかということをもう一度インサイド・アウト、自分のなかから本当に考えるという時期が大学時代にあってもいいのではないかと思います。保育学科とか福祉学科に入ってみたけど、やっぱり自分はちょっと違うというふうに思った学生がいた場合に、方向転換が許されるような大学であってほしいと思います。

今回の電通育英会の IKUEI NEWS の中では、絹川先生が「大学はモラトリアムを用意する場でありたい」ということも書かれているので、そういう大学の本来持っているモラトリアムとしての場、大学っていうのは自由にいろいろなことが試せる、たとえ失敗しても、人生で失敗するともう取り返しが付かないけど、大学の場では何かやってみて失敗してもその失敗は後に響かない、そういう場っていうのは、いくらキャリア教育が大事な時代でも、そういう場を大学は確保すべきではないかと、そういうことを言いたかったということです。キャリア教育の必要性は十分認識していますが、大学をキャリア指向の強い専門学校的なものにすればいいということではない、大学のよさをどこかもって欲しいということをデータから言いたかった、ということです。

●下村

友人関係について、でよろしいのでしょうか。浅野先生のご発表を聞いてちょっと思うところがあったので付け足したいと思うのですが、友人関係のイメージなんですけれども、他のもう少し小さなサンプルでこういう研究を見たことがあるんです。我々友人関係といったときには、何となく仲間思いで優しくて人付き合いがよくて人気者で、っていう本当に友達好きなイメージがあると思うんですけども、あくまでデータは全部本人に聞いているということが重要で。本人は自分はみんなに好かれていると思っているし、友人思いだと思っている、っていうことがとっても重要なポイントなわけです。

何を申し上げたいかというと、実は、例えばここで言っている友人関係というのは、こういうデータを見たことがあるんです。要するにキャリア意識が一番高いのは、人付き合いは良い、という風に回答するんですけども、決してその人付き合いに巻き込まれるようなタイプではない。なので、今日飲み会があるから飲みにいこうぜ、と言われた時に、いや勉強するからいい。次授業さぼってどっか喫茶店いこうぜ、いや授業に出るからいい。これは、全然友人関係が良いとは傍からは全然見えないんですけど、本人に聞くと、自分は色んな人たちと交遊を持って、色んな友達グループと付き合いあって、自分は本当に友達づきあいが良い、という風に回答している。そういった研究結果を見たことがあるんです。

要するに、浅野先生のご発表にもありましたけれども、ある特定の友達集団に巻き込まれているというよりは、それを渡り歩いていることをもって自分は友達づきあいがあるし人付き合いが好きだし、自分とはとっても対人志

向的な人間なんだ、という自己評定をしている。なので、その調査では、あなたは友達の会話を遮ってまで自分の意見を通すことはありますか、みたいな項目があったのですが、その点数も高い。ようするに、自分の言いたいことは言う、相手の言いたいことよりもむしろ自分の言いたいことを言う、というふうに回答している人が、同時に対人志向も高くキャリア志向も高いと回答していた、という結果が得られている。

こうした結果から、ある本で私はこんな風書いているんですけども、ようするに友達が多いということは、そういうタイプの子にとって、親密な関係というよりはむしろ対立の関係がたくさん契機がある。自分は普通の人たちとはどうもちょっと違っている、飲み会に誘われても行くタイプじゃないし、授業をさぼってまでみんなに付き合うタイプじゃなくて、自分のことをきちんと考えている。そういったような契機に恵まれているということが、逆説的な友人の機能なのではないか、とさえ書いていることがあるんです。

これはまだ仮設段階でよく分からないんですけども、友人に対する思いそのものがキャリア意識の高低によって全然違うことから、だいぶ友人のイメージというのを我々の方で豊かに膨らませて考えないと、単に友達が好きで人付き合いがよくて仲間思いで、っていうのでは全然ない、というのは少し強調しておきたいポイントではあります。これが浅野先生が先ほど、東北の北国の方で友達にずっと巻き込まれていて傍から見ると決してキャリア意識が高そうには見えないんですけども、こういった結果というのはどうなんだ、というときに一つ整合的な結果として解釈できる手がかり、鍵になるんじゃないかな、というふうに思っているところです。

●溝上

私の質問には全然答えていただけなかった気もするんですけど、時間もありませんので、もう十分です(笑)。じゃあ浅野先生。

●浅野

補足を一点したうえで、ネガティブな見通しとポジティブな見通しを一点ずつ述べたいと思います。まず補足ですが、今回私がこの大学生調査のデータを生でいただきましたので、それを使って分析をしたわけですが、分析のテクニカルな部分を全然説明しなかったんですね。で、友人関係を重視している、友人関係を求める度合い、っていう変数をどうやって作ったのか、ということを本当は説明すべきなんですね。それを説明すると分かることは、ここでいう友人関係の中には、結構サークルとか部活が入ってきてしまっているということなんです。だから本当は、どうしてもそうせざるをえなかったんですが、友人関係を親密圏に、ボランティアとインターンシップを公共圏に、というふうにわけて変数を投入したと説明しましたが、厳密に言うと、友人関係の中に半公共的なサークルとか部活とかいったものが入り込んでいるんですね。だから、それがもしかすると、キャリア意識を高めるのに効果があったのかもしれないな、と思うところがありますが、下村先生の報告の中で部活やバイト、サークルに夢中だとかえって就職の活動終了時期が遅れるという話もありましたので、ちょっとここは慎重な検討が必要かなと思います。

ただ、武内先生がお示しくださった資料のなかで、大学類型による満足度の違いですね、どこでしたか・・・図の7でしょうかね。これを見ますと、伝統総合大学と新興大学の間である種の逆転が見られる。つまり、学科やクラスの友人関係に対する満足度は差はないんですね。ところがサークルの人間関係に関する満足度は、伝統校が圧倒的に高く、新興校は低いわけです。ですから、今回の分析では友人関係という風に一つにくくってしまいますけど、それを更に細かく部活・サークル系の関係と、本当に純粋な友人関係と、っていうふうに分けるとこれは違った働きをしており、かつ、それが大学のランクと関連しているかもしれない、という可能性を示唆しておきたいと思います。それが補足です。

その上で政策的なインプリケーションなんです。まずネガティブな方から言いますと、公共的なコミュニケーションの養成に一番効くのは何かというと、実はですね、非常にネガティブなことをいいますが、家庭、だといわれています。これは本田由紀さんが強調されていることですが、どの家庭に生まれたのか、ということが公共的コミュニケーションに長けた子に育つかどうかをかなり規定してしまう。その後学校でかなり努力してもあまり追いつかないのではないか、という見通しがあります。これは非常にネガティブな見通しです。

もう一つ、今度はポジティブな見通しですが、社会関係資本論の中でよく言われることですが、ヨーロッパの北欧諸国、スウェーデンとかノルウェーとかフィンランドとかですね、これは社会関係資本が極めて豊かな国だといわれています。その豊かさの背景にあるのが、勉強会、スタディグループカルチャーというやつで、彼らはものすごくたくさん勉強会を組織して、大人も子供も、みんなそういうのに所属して活動を行うんですね。

私がやった調査ですと、日本の若者で学校外の趣味のサークルとかそういう集団に入っている人は約 13% しかいないんですね。これを昨年メルボルンである若者に関するシンポジウムが行われまして、そこに行ってこの話をしたら結構驚かれました。オーストラリアだと同じような質問をすると、約 5 割の高校生大学生が学校外のサークルに入っている、と。なんで日本はそんなに低いんだ、と言われてしまうわけなんです。

そういう勉強会カルチャーとか、サークル、趣味の集団カルチャーみたいなものをもう少し盛んにすることによって、さっき家庭がと言いましたけど、多少取り戻しがきくのかな、と私個人は思っています。特に大学の中でいうと、これは溝上先生が大学生の学び方に関する本を書かれていて、その中で勉強会の勧め、読書会の勧めをされているのですが、私はこれには大賛成でありまして、そういう学生同士の自主的な勉強会みたいなものを大学として何かこう、どうサポートするのか、具体的には分かりませんが、そういうことが出来たらいいな、と個人的には思っております。